



武江年表

三



武江年表卷之三

延宝元年癸丑

九月廿一日改元

身請弘福寺宝剣

軍山後牛
徑師也

翌年小石川法堂止道堂成○淺草正直

菩提寺始

○九月十七日修復九代稻繁率七十才

○十月廿二日蓮舟師里村玄祥率○十一月廿念地院立山十刹法

山惣福月命あふ○十一月廿拾上寺大澤成

谷原常味
此寺は清く

○十一月廿日行桐石丹彦率

六十九号宗園石丹彦率乃之祖
あり宗院言林彦小葉行

○幼三帝其居少大石顯四天王
推立を上下市續担を具行以

元祖後十而
十二方あり

初孫志意を率り
始て荒りといふ

同二年

甲寅

武江年表卷之三

二月廣草大田寺十五重再建○二月廿六日夜帳を計の要雲
東より西に捲引空中棉を海に流す如し

○八月久保八幡之内時の鐘其切也引引若松有也其持し
成る○了翁坊白金瑞雲寺の経巻を速荒典に生解一万余巻を
を収む○久保坊○松尾忠茂乃今年葬祭し之凡羅坊

深川坊を結ひて経に芭蕉一掃を裁世入芭蕉 居といふ

○十月七日持持探函法中卒七十三才二田大寺より小墓碑あり 好まの内建並一雨之といふ

○同廿四日三玉等海堂卒久正の能出あり 弟自持院小卒 四月四日

○二月六日古筆り代卒○二月廿二日合形新地船入が成る
善天中肌體念庵を葬し之後氏を張給しあり

○二月十四日古筆り雪卒六十才又念庵と号 善りよりあり

○九月本控町山村長を更其居を始て其我續相を真行止
此時の名譽務岡宗吾我といひ梅の小亭露妓の始小血縁二年未其室町夜の湯
高の由り不短云々といひ燈さまといひ宗居万長山村山又左方未形りて其雲のあふふ外
男女交りて其家相を傳へけりといひ
其の六等相故小其我相を伝へけりといひ

同 巳 年 丙辰

七月十四日風の宮東流あり○九月換炮海築地中室守を更其勤を

能真行一奉小春 ともりりその乃成く雨降○八月十七日儒送形有之竹京降

柳谷小卒名小芭蕉号静軒本朝 聖業を講じの始之云○九月廿二日夜子刻増上寺又室大火

果本寺安重の所焼火盛あり一人身を潰して烟中入其像を
持く應永福に其像を着るもの或の信と一或の信と一不見其像

あり又其足踏かへ欠れ其像を更其殿の中を打て捨ひ張りて其像を

接てりし如く

上津土渡小 篇のうまを畧す

○十一月七日暮六時許京江戸町二丁目より火火して新水風烈しく一廓焼亡此火廓亦焼かて本所中の火火して焼く

以時柱女十二人焼死其後始て焼く 二名女の脇を飯宅あり高貴す

○十二月廿六日江戸小火災ありと

本所城 未詳

延宝八年 丁巳 十二月

己月八日下谷池のち横田七市右衛門より事起り以て難司若鬼子母神を祈りし其男木村伴方東門小畑町三又川より今日鬼子母神像を感得し其後七市右衛門の妻男子を以て難事此像を本所本佛より安んずる○七月中旬より江戸中町へ踊りしはり災難を以て御祈神あり

以家の一幸小延宝己の年の冬 踊りあり老か踊りしなり

○八月六日大風雨本境町甚きを以て溺上る

○江戸省板紙 七巻 ○奉朝改元考二冊刊行 重加編

同六年 戊午

河原上人與澤村澤真与九品佛冥基 ○東海道釋法録五冊梓行

他者 未詳 ○舟舞妓甚く所存元江代月市村行々遊伎藝の芸云々

貌も災難ありしありて無常を悟り菩提の門に入り今年

廿五日依後を勘定清浄なるに為行法匠とある様云を以て

少く舞納の目刺髪して舞着たり後を脊おひ詰ふ所より

ある後小本所立つ目自性院を再興し常行念佛を修め世に

作の忠孝と云ふ 享保三年 小寂せり ○十月六日羽根右系時行卒

○同月八日古筆二代り榮率 七十二才

同七年 己未

夏大為大川筋まがに生れあり

○十一月二日浪人平井権八つら西川五郎つらに刑せしむ浪人の初め西川五郎
の初め西川五郎の長き志を九組で焼く一とて同一時に
その人あり申す傍の事ありの人の一とて焼くありあり

○十二月十二日連舟所里村思通率六十五

延宝八年 庚申 八月廿

正月八日落木春朝率北黄坊持次と号し大河の事をあつて海賊を信し

○二月十日朝五半時つらに半時つらに近園夜つらのつら一つら宗内情書
并海考江下多宗
因今并り要し

○二月十日朝五半時つらに半時つらに近園夜つらのつら一つら宗内情書
四月朝五半時今年同
此等り築地おら
て二月半時建ちあり一申或おらん元一り為奉教おらん
南向小半時建ちあり一實文二年の江戸おらん元一り
周おらん今朝大坂町を先町と唱ふるおらん昔おらん
あり一以橋の氣を高い一おらん一あり一あり一あり

○四月初日掃帚つらのつら一つら五月林甚春つら春務率六十三

○六月廿九日能人松江惟舟率七十四

五智如来の大佛入仏つらあり再建 ○八月廿八日甚如来つら

原町靈巖つら後池八丁つら海とつら上つらりつらてつらおらん

橋つら損つらしつら止つらるつら谷中つら法つら慈つら率つら本つら里つら深つら松つら村つらまでつら半つら傾つらくつら

在つら海つらにつら筋つら筋つらとつら浩つら波つらありつらてつら氏つら家つらをつら觸つらるつらは

○十月晦日酉の刻つらよりつら坤つらの方つらへつら度つら廿つら二つら尺つら脈つら長つら廿つら五つら寸つらあり

自つら守つらありつらしつら根つらのつら里つらをつら長つら空つら里つらとつらのつら半つら三つら月つらまでつらあり

○技業拾葉全集つら 三十三巻

此年間記事

永代橋八幡宮の江戸を離れて多岐の事も稀あり一六八七
のころに江戸を離れて二二町のうち酒肆つらをつら多つらくつらありつらてつら多つら岐つらのつら女つらを

今の東 二本榎 比谷進 荒穴 林田の 新小田系町 三河町の くらぶく町 林田

新小田系町 くらぶく町 今この ちんきの河原 一ッ橋より おせ橋 今この 戸越橋 嵐丁の 長

今この 二所橋 今この 久吉町 向柳系 法界 上野

法界 社あり 志らく丁の浜 日西の 東殿山 入口 天祥里 門 丸小池

浜へく車知坊あり 池の端通治地あり 新田より上の門を西側

ゆきすき町 法界 今の新田後新町令澤町を二田小加州

郷あり 今この 今この田引く新田系中引く今引く今引く今引く

今この英町の西本多野州後藤郷あり 今この新田系

後藤郷あり 今この同朋町新田地の西極本海あり

新古柳橋あり 今この新橋を新橋あり

今この新橋あり

治船を新田船為新田より東のく横橋あり 今この新橋

と元善雨の橋とあり 今この新橋あり

船を画り 考 田向院山門あり 吉原ふけん

とあり 八丁橋を院引く

小橋町江戸町志水町あり上町 寺の 白金

瑞雲寺 橋あり

あり 吉井町あり

同地小あり 吉羽町あり

跡を志丁後方より丁あり

あり 柳系中後郷あり

又農あり

天和元年 辛酉 九月廿五日改元

二月五日田中後守宗刻

上野八幡別当後守宗は信持法下
亮受其墓 五月院敷と改る

○浅草川廣ぐる ○諸公肌腫 ○山王神田の事終隔年あり事

是より五多礼
年毎小節あり

○日蓮上人に百年忌

法苑宗子
院法令

○十一月廿八日九山が妙子

とりの火事いり焼亡 ○十二月廿八日川田の産をりお火してはる台
赤坂麻布三田芝生町あり ○今年支國橋は掛替あり矢の
念南服より奉新二目的橋造へはる板橋を設く今を元改出
とりの十五年の後元禄九年より今の所へ經營あり

同二年 壬戌

二月六日市谷小あり一後本山天龍寺新火より遷置年日首

後する ○二月廿八日俳人為山宗周江戸に平氏 七十八才

○三月俳人名田本琢率 未將の男あり ○四月琉球人素禰 正役は横子

○四月十七日明の糸舞あり生約込中率 年八十二 常初久慈那瑞庵中

并葬以 ○四月廿九日將時雪彦率 に十才 撰出女

○七月儒師本下順庵 信稱 年三九

○七月二日大雷に十降雨墮 ○同日落合茶屋より常山白翁が茶

禪師寂以 ○七月法藏人海瑞瑞信の於天下一の号を信

○同月在形船の寸法決定あり ○八月朝鮮人林禱 正使尹祖賢副使李
彦綱使事朴夢俊

奉持ててを
旅版とい ○九月安宅丸舟船を解ひしうせあり

○九月より幕府船本敷山内小地をのりり ざりやう 学寮を遷不忠中

清より幕府船を移し燈臺を建る ○青山橋を長保寺より古洞

佛河津陸像を安置以 寛平十一年
一勝より 昔本本が寺の月あり一と大坂

城下に移さるる高城の後江戸に持来り今村宗八丁場の在
るありしと堂守伝念和尚小約して今年九月送る所とす

○十一月晦日戸田茂晴の男伴寅の卒す墓所浅草寺合縁より在
る追悼の奇人の習ふ所のせり

○十二月廿八日赤下刻為込大田寺にお火
事江上野下谷池のそと筋遠点門神田の急日本橋まで浅草法蔵
園法門の塔町辺矢の法念の因縁焼落本所深川にお火事

火事 此火事不遇にて法堂を多々つりて或は焼死怪人未幾一と天祥の妻死
人ぬくそ法不悲泣のさぬを哀憫して字寮のり箱塔に卒末焼く

元ノ田圃と減る ○湯沼小町屋を燃せしれ様了協とす
此火事の後本所士民の家を拂せしむ

天和三年 癸亥 五月至

正月元日大馬波あり ○正月車長持を燃せしむ
火災の所乃協の
跡とあるあり

○二月六日市谷お火 ○二月十六日牛込お火

○浅若小路実蔭公下向 此火焼日射
を立ぬす

あるりし其のし素いあるはれなり

○本年筋廣少海子殿 ○二月廿九日約込所八百屋久々焼の娘

お七火刑小切もる 今年士女といふを類素世人の知る所あり十二才の春松竹梅の
二字を去る様歌をのいまの流殿小掲さるる今小ありこの

お七の言中七句文のまうし子ある也うくえつけしとて之様素ハ約込所素寺并
ありを世身探枝の家再建する所なり 郊外雲霧湯沼江戸管中蔵蔵の廻廊も小
うけくるを靈塔山法華宗ありて云歌八百屋娘お七十一才の年晦之遊室は年
夜ま三月と虫宵又同中并お七火刑天和二年とあるせり此様あり

○夏江戸大昇久 ○六月六日急卒内率 此火一素居士といふ信子りり
條の年内あり約込海子も小

○雲光院本尊も法像も引動も雲光年
墓あり耳底記小ま山を掃り
人の死すて法曹の人ありとあり
の災後本所田の辺より深川に移るる塔町の如小あり一於行と約込

うららるる○十二月五日江戸脱合里小舟 ○より作ちくさい赤物船母夜叉梓行飛或鳥丸

先廣の船先廣の船と云ふ保志の妻の
以の編みと云ふ今年正行せり中

船年間記事

安宅丸の御船を解あけせしれ一時安宅河原ありし御船を被

大船をさすはし一川の東岸の地へ移さるる

○大船形やまご船を修やまごる東安丸廣島橋 津田市丸舟田一 熊一丸彦太丸

山市丸日本橋の船之屋 分て大船ありし御船やまご船の父は東の一舟江戸

舟子拾遺舟子拾遺あり 事跡合考云天和の山田津市市といふ舟人の合帳を修り

○使客源見十五里遠流遠流は後十八年を懸て室中及び津を渡る

○千川上水せんがわありしは安宅天和の比ありし板橋の西の方練ねりまるの事

のうトヤトる津の池の方より津の橋までひ柳系しやなぎ筋ふりきりきり

流を千川上ありしは享保七年より止あり又同一流津の内おんせ縁際

川の流を業平橋筋ふりしり又津中ふりしりしを白堀上しろくぼりあり

といふ是も享保中修しゆる上ありの川筋今も業平橋の東の方

の橋際より葛原くさのへ筋世澄村の方へ通りて小川一筋あり是別と白

堀上ありの筋あり 以上事跡 合考小舟

○津田水安町の地へ作竹筋たけしな川町へ對面筋しな筋ありありしり

天和中作竹筋たけしな筋ありしり後安宅の以町もち筋ありしり皆川

町といふ松平町代地の所も元福以来ありしり皆川

舟ふねありありしり ○古の以土作筋しな筋あり流あり

○天和申津藩より経路へ商人の行状を入る一西より矢小川へ
焼亡以後再興あり一と云々

○紫の一木小日本橋一丁目塩屋の腰刀統町ふの申元ハ勸助より
とらまうける沈のまこのおん安養保奉不了場の首安養保其の
陳三度展版版田町の臺座を温純云々とあり此時代の七中りおある
へ一○此以を中り一噴比丘尼の内郭田めつと町多町よりあり水
玄お娘おま川長傳といふおとよりあり一とそを志ある羽二
重の投段巾をさうろつてこまを編子製買とくらのあつたり又
宝永の以まてあり一縁持といひ一も土奴ありあり一

○此時代小島雪山の書り一幸小村氏と云雪山ハ肥後小瀬本の産物一
付く三三と号一如名おの付送あり如後おの關
ふを細川お小村よりお入ふ三三とも又細川おお小村より三三とも又三三とも
原一第ハ小島雪山も知るり学又もおのり一お人より縁持法を口授け縁持

のやえあり其種原元原の忠記福之吉山と方介の友と一これと小虫の事ハ不同
とあり或とき智立といふ不と書ても筆力積神雪山小島をいふ事といふお小島
獨立ちあり沈の三三あり三三あり一と書ても筆力積神雪山小島をいふ事といふお小島
と因伴してま雪山海流と小島あり後室町原世お小島偶居ハ此小島室年中あり
へ一門人五六あり原はも二人と云へ一ハ二老界傳小あり
三老と云雪山原はの二老あり又を世時人傳小もいさうその傳をさるり

○池乃瑞海袋圓行勸學院の了翁傍觀ハ羽衣の産あり如ハ伝承不傳一
藩短を裏集せんゆを後記一發行を原一けつ寛文
二年小あり去年と云燈を燈せ一指痛のやと一あつる小愛申把勢與極の雪山如
定得原より某法を授けお小島念を記つる沈の燈の内よりおおつて換るま
とて袋圓と号以後おまの山の標小表七る裏行ハ二名の市店をひつきはまを
ひき宛て志取成統の料お充て某非助あつるゆをを小島海流は小島隨てひき井魚を
あても似せ某を御令一々奉りりの幾人といふゆをを小島海流は小島隨てひき井魚を
を養ひ市中を御細一々奉りりむお人これをり翁お告て云見を記するんは
のま六行へ廢るへ一若廢るへハ大勢あり破んと云云寸志お一とありまの
おのやまの法人を助けお人ありあり若お某を棄てて妻子の役りともあり
奉まの二つありと或人又曰若彼は某小島山家ありと云ハ小島下お某へ一書同
日月の末此小島原行て天小おまと同書數回小一々互不笑一々分ま一と云

貞享元年甲子 二月廿一日改元
正月晦日彼三忘令此定 ○元三大師七百卒忌

○知良院を湯島へ移す 舊地へ林田の森あり

○弘法大師八百五十年忌 ○二月廿日古寺二代了社率 四十六

○東福寺七仏茶席下宿より麻布へ移す 茶室

○九月廿二日官医退是本玄琳率 麻布祥雲寺 升葬す ○九月大風家屋を吹倒す

○十二月圓基作條井算哲天文儀小正 良 良義抄そそ天宗妻へ改磨の

○甲子江戸鑑刊行 松令案板式鑑板行の始といふ

○東世改磨領行 但宣成磨を改め小正あり

貞享二年乙巳

二月廿二日流星東南より西北へ光程百里を照り暫く

有く空に雷あり雷の如し ○其二田魚屋親吉困帳 後井より三田の山原より又もきより下りてせど

○五月梓四子福昌と茶原如來冥帳 この時を十二神の

○日暮里院傍に神社造営 ○六月廣業寺智良院別當

を百敷とて東叡山浄業寺と成す ○九月廿日將時水真安伝率

○十一月靈山寺再檀林と成す 以時清平小あり之縁之年小正ありといふ

○同三年 丙寅 二月甲

正月一日古寺に世り周年 ○國之月利根川を武蔵とす

とを中絶と定ぬひ葛飾郡二ヶ巻小正 本寺橋より東海川本西の地ハ葛飾郡葛飾郡中へ上代

○二月服忌令出改 元禄三年又月尚道加又同三年九月進加

○九月品川所敷改 ○九月小石川白山持現宗礼始

○九月大石川神神組と号し 今も其堂を

○九月大石川神神組と号し 今も其堂を

同七年 丁卯

二月十八日より清系寺親世音宗帳 ○同寺二五門部令親世音宗
勢至像建立 頼王と親世音宗親世音宗の像を建立す
並房持梅丁波井三高僧の像を建立す

○江戸惣麻子七冊棒行 他者友田氏

○七月廿二日より廿六日と奉前小籠て宝生寺交勅進徳具行

○女岡別家図彙板 江戸時代の風俗
江戸小籠 ○二田実相と貞女坂念卷公愛

○正伝女貞享に奉丁卯十二月十二日あり

是處の江戸町に存する存徳寺の娘より
と實相と立て父母小籠あり後三福
ある村田信太郎といふ者小籠一と貞操あり而幸小一とよく交小つらう父母再婚の事
と近る事類あるをいひて小食を減一日としてとて小籠を小籠一と交小食を減して
その貞操を云ふあり 二田実相寺二ヶ寺ありとて小籠町御照山実相寺
あり

此年間記事

貞享元福の頃より江谷村を去りて寺を建てて小下さる

○貞享中波あり六ヶ橋流るまより掛り奉ありといりて

○好古日録云 婦女の普く用る并ハ貞享年より河厨子所製り扱
後並りよりあり工人不飛々々も後終不十数年より河内并江
まありしりとなり

元禄元年 戊辰 九月晦日改元

○改元其幸祈の地ハ元の如く寺土家及町屋をくくりて好古日録の地ハ成
は附り幸の西へ廻りくくりて幸庄を幸西と改め
○改元其幸祈の地ハ元の如く寺土家及町屋をくくりて好古日録の地ハ成
は附り幸の西へ廻りくくりて幸庄を幸西と改め

○九月神田明神系神楽結物始り 河城内へ入る

○十月二日儒師西山健甫卒 名光善坂中 養玉院小葬

○十月十八日連舟原里村昌程卒 ○十一月神田橋河門和不知院
を移りて河新形所となりて亥年より改て筑波山後持院元禄
年と号し 大船場所より移りて筑波山後持院元禄年
と号し 河新形所となりて亥年より改て筑波山後持院元禄
年と号し

同二年 己巳 正月

正月十二日儒師今井弘亦卒 号魯亦卒ハ 再移り小葬

○正月十六日江日老人星現 老人星ハ老人の瑞あり 福善寺より移りて

○五月十六日雨天二十三間堂より修善家の后福井湊在馬ノ又員五
千二百石を封て江戸の天下つと改る

○十月婚姻の時ありあむせ河制林あり

○十月廿五日夜異星墜の方小あり ○十二月山村孝吟翁并男
湖を去り 召か舟学方の始あり同七年法中ノ叙也

○江戸圖澄徳目板行 画工石川流宣後之 編一板本一冊 ○再訂江戸熱蔵子板七冊 松月堂 印刷編

同三年 庚午

二月虎石門外方左馬町より汐留まで大工町より元材木町まで

廣瀬とある長崎町の廣瀬を築

長崎町の海邊小橋の南に築町、桶丁の南に海邊大工町とある。

築地

海濱築地海邊の屋敷を焼

火災の時、焼く。

○四月十五日西恩池を築西恩池上人せんじん念佛令海濱築地

群集一十念を父の善の名号を乞ふ事敷

○五月官中威徳寺今天丈六佛建立致す未詳

○十月法華寺の別当僧法院と改改○改訂山家文集百廿巻

○十二月十七日金胎工横谷宗与終終○東海道分間修築梓

○十二月廿二日昌平坂大聖殿上棟是まで終り、是よりあり、今年この西より一、

元禄二年 辛未 八月

正月湯島并大聖殿清浄成上座より、この地は、是よりあり、

非を修く七十三段、先儒の像八画工、將神洞雲を画く二月、昌平坂あり、
同十一月、秋奠あり、寺、湯島、八、は、所、聖、の、地、度、かり、一、六、今、の、西、代、地、を、あ、り、て、種、之、
おけ橋古名昌平橋と改橋

頌大成殿新落

芝山

登、昌平坂、我、士、山、東、斯、度、斯、經、始、倏、忽、成、廟、宮、楹、切、
依、勝、地、莊、觀、聳、清、穹、畫、棟、麗、輪、真、鱗、薨、真、玲、瓏、四、配、玉、床、
下、雍、容、珠、箔、中、三、才、抵、太、極、六、經、定、折、衷、禮、樂、享、雅、飾、文、
教、克、磨、礪、山、知、仁、有、樂、川、盼、道、罔、窮、時、否、欲、浮、海、栖、歸、
魯、門、豐、祀、誠、如、在、吉、蠲、捧、芳、樽、神、明、永、隆、監、國、祚、齊、乾、坤、
春、入、舞、雩、節、化、雨、澤、黎、元、

○四月麻疹流行 ○同九月俳人一押打不卜率本西法惠 寺子舞

○同十月俳人福田彦彦彦彦 ○四月碑文谷法花寺谷中威徳寺

布谷自院法花宗悲田派悲田派をあり、天台宗となり、七月日蓮宗

怨田派の僧俵豆清く流さるひたんた○今川橋より小川始て増割る

○六月十八日紀元根桑山ねさやま覚かく上人東幸五十五年忘わす奥おくと

大師と後号をある○七月官医あまのい半井ト養やう服ありて俵はたけ之宅みやけ

清く流さる○八月陽ひかり晴はれ雲くもをより速はやくあり山崎

○十一月十九日茶人清水初岡幸号張紙菴年号

○慈濟庵空無上人勅化して造る所の金洞きんどう之像の六地ろくちをより

眼ありて江戸六所むつろ下くだる川がわ 古院号系源記号年

○館優たかのう名な本ほん辰たけし之助のすけ陰かげ漏ろう不ふ行ぎやう行ぎやうをより 元集辰之助より考す

○尚なほ昔むかし昔むかし小こ之の孫まご六むつ年ねん卒すま大だい徳とく院いんをより すまは徳院分まの陰頭 兵角

○鎌かま倉くら元もと福ふく年ねん寂じやくせせととあるを陰かげ井いをより すまは鎌倉元福年寂せとあるを陰井をよる事と云ふはあつる小言台柳三三翁の後

○あるを陰かげ井いをより すまはあるを陰井をよる事と云ふはあつる小言台柳三三翁の後

元禄五年 壬申

正月元日未申の時日蝕ひがし半はん ○浅草寺観音あさくさをより造つくり

○大塚おほづか渡わた守まも徳とく堂どう濟せい建けん立たて ○六月五日より佐州さしゅう長なが光みつをより

如來にょらい圓えん向きやう院いんをより本田長光史子息三人の像

○八月法ほふ華け子し司し大だい久く保たけ氏うぢ忠ちゆう宣のぶ父ちち母ははとと復また小こ孫まご念ねん念ねんをより

長なが光みつをより境さかい内うちをより五いつ寸すんをよりありけり那と木の藤をとりてあり

牛うし湯ゆ長なが命いのちをより裁とりりのりをより牛湯長命を裁りり

のりをより牛湯長命を裁りり

○九月濱はま茶ちや川がわ祝いわい訪ぼう町まちより聖せい天てん町まちまで敷しきけけ禁きん制せいのりをより

建けんつつ

同六年 癸酉

善也及後生之法然上人自他像江戸に於て冥怪冥洋

○二月僧源務名去福林令平願珠齋約達庵光寺小葬卒 ○夏中夏中の勅を乞ふ

世上小疾病行事を告ぐる事の妖まじ一殺の呪とありて事

を除く事某法の書勅を捧行せし事中に世妖を言ふせし事若

ともを刑せし事と云元

○五月通町を小川町小石川五ヶ陣先町を安板町と改む

○六月廿八日能作之南之團社を小石川の句を吟み 奇跡考す

記を引く事天下卑賤あり田面あり一に用む句の句を 卷一並乃

○七月新大橋渡 支那橋 五ヶ 年の冬に源川大橋ありとりける事 幼君 やう けい り り

○八月廿九日之南之文極本東吹率 二 本 板 上 行 ち 葬 せ

本 の 葬 も 源 川 に 行 は る 事 あり と 云 南

元禄七年 甲戌 五月

正月八日狩神洞雲益信率 上殿 禮 金 ○二月廿九日和川在海上燒失

再 葬 あり ○六月湯湯雲と雲八良良良之津の率と改 八 十 余 才

○六月廿六日杉山換校信一寂 孫 勤 と 葬 ○七月淺系大獲院不妙

八月八情宮を勸修せし事 一 孫 不 元 禄 不 年 と も 云 南 と 是 南 の 文 珠 院 と 云 以 大 獲 院 と 改 む 事 安 元 年 十 月 十 六 日 新 由 定

○八月正覺山月桂と十刹不列せ

○八月正日小堀改尹率 七 十 才 長 靈 雲 孫 十 師 在 州 後 次 男 あり 源 川 海 上 葬 せ

○源川宣雲と冥刹 世 不 云 一 據 ○高田穴八情宮社地不求冥明神

を勸修せ ○江名活板行七卷

○増上寺世二貞養上人大傍正不但足とり代く大傍正なり

○十月七日奥澤村淨土と冥基所願上人寂 七 十 七 才

○十月十二日芭蕉翁浪苑おんえん寂以しやくい ○十一月十五日舟人山名金山やまのやま卒すま
市管管丁並照院并葬以 ○同十六日吉川惟良翁卒七十九才
○十一月新吉原大門也しんきちげん高札を建てし

元禄八年 乙亥

二月八日未刻大風江谷傳馬町えいこよりお火高札の辻海辺まで焼亡

○三月儒原谷一飯卒名松号已千浪谷長谷寺小葬也 ○柳原押典翁翁修營境八十才弱也

内構未成就 ○五月官医余浪古翁卒八十才弱也

○五月美濃源元作小園原号を退稱しぬ

○七月渡必寺正僧正お任以 ○八月朔日奉所拜淨土入佛供

養あり五百石淨像を彫刻以是松雲源原自く勅化し七刻

○九月明の心紙原作寂水戸後家より小葬也

○金銀を吹越さる九月より通用より元禄金銀元字令限し

○十月中村小大倉を建てし ○十月十六日東叡山二世公海傍正遷

化孝八十九 ○十二月新寺原橋辺よりお火新橋まで焼亡

同九年 丙子

○新橋始て樹百石懸け橋のりしはるおの船渡し未有し元禄三年の富太渡し

○正月十日官儒人岡友元時及市場小卒名第号竹洞

○二月收時廣涉室洪禪を繕せしめて遷し給へり

○五月廿二日上村中書本号某師如來江忍志賀郡円山寺より

遷せしむる同廿七日十二時日光月光像が羽山山形立るより

後をせしむる ○金銀流通を定むる

○六月十九日大地震 ○十一月十六日東叡山中凌雲院を慈淑僧正

近化 別長法親法院所尼多く上本寺
とまを世に益徳奉とりの

○十二月十二日水府彦備臣平賀重榮率 ひらのせらちん
公年表家永とて其年
碑の六年山紀史の事

元禄十年 丁丑 二月至

五元集拾遺 大小の吟

大 二 四六 八九 十一 十二
庭を あらくたく 衆 院 乞 の事 と角

○正月十五日北村湖 こしん 喜率 幸余

五元集 湖喜をいひみ

ほくよむ 綴冊もありむと 爰 と角

○正月法然上人圓光大師の遺号 とあふ ○飛石村 と 銅鏡を 湯 湯 とあふ

○下谷五條天祚今の所 不建 首の上破小を照磨火災存願川崎春とあふ
及初不語度ありとりの今年後されも際川

冒徳の 宅地 ○酒運上法定 ○五月八日 とり 新大橋 不 於 て 室 と 新 と 徳

勅進能具行あり 室生を吏
助を勤む ○六月御奉令通用始

○同月唐同 と 十一人 不 定 と ○七月 と 後 と 必 と 親 と 名 と 半 と 權 と 持 と 院

大日堂法 と 定 と 立 ○九月 と 飛 と 戸 と 天 と 満 と 文 と 祚 と 子の法武白川吉田 と 不 と 後 と 了 と 以

古 と 宰 と 府 と の例 と 不 と 准 と せ と べ と 丸 と 旨 と 勅 と 許 と を と 出 と せ と

○十月十七日大坂上の町 と たり と 火 と 災 と 最 と 多 と 小日向 と 舟 と 込 と 田 と 安 と 内 と 代 と 友 と 町
ま と け と 焼 と せ と 以

同十一年 戊寅

正月十三日唐人桃田柳栄率 名守光号出番赤
池上平門とて小年

○二月川村随員 と 百 と 名 と 主 と 漆 と 祿 と を と ぬ と せ と 天 と 和 と 乙 と 亥 と 年 と 新 と 梅 と 子 と 丸 と 員
享 と 甲 と 子 と 年 と 乙 と

とあ 大坂川 と 内 と 善 と 徳 と を と 命 と せ と せ と 功 と 儀 と 江 と 戸 と 不 と 降 と り と 年 と 乙 と 亥 と 乙 と 丑 と

安治川も此時流るり ○五月小石川河原法造造営

○六月九日医所板垣宇治率廣業合務 ○七月傷所園井惣巻

率名茶号と東皇 ○七月深川海軍一万坪を築海防

○七月廿二日新堀自令法殿まで堀と号

○八月新自永代堀今日より出来ぬ

○八月東殿山根元久中堂元久文殊橋二重門并山王社今の西 浄蓮後

廿八日中堂入佛あり九月三日信長五日より商人多指を田々する信長の家

町屋をひく丸屋小治とせしむるもこの時あり平水町八軒町古新町東坂町

南郭文集 東殿山瑠璃殿

一旦経営結構新 入門何處避紅塵 玉樓金殿高多少

不庇貧民七尺身

○九月六日段橋殿の勅額刻了あり以勅額の持院院基時書ありし所水鏡

量りて三重の柱を竹本を以て造り極らむ川中堂の堅樑の丈尺ありし遠ひさく

○同日己刻に新堀南堀町より火出風烈しく大名路通町筋

神田下谷上野法華坊法華山せんたう谷千坂掃部宿九三 新法法系

世二男を焼く元禄十一年より深川本建於寺在河原鎌々

河原八右の道徳十五男と成る ○二時新神社板本ありし東殿

山中堂を焚く法華山法華山町へ移る ○十二月十日奉石町式丁目より

火出日本橋靈巖殿八丁新法法法細島まで焼く日本橋焼屋

人多く死す ○十二月画工を交潮波瀾せしむ

○十二月廿二日佛作本きのし 火店率名貞幹林率と九

巳十六日異後町二丁目

正徳末ありし今正徳元年元日玄冥何の取とも知色を女の首まき
級あり人々驚く事首人の取を得る事武門の祥瑞ありおろそ
とて是をまつりせんちち聖地神おんあま不崇おんあまありおんあま後おんあま不おんあま仍おんあまりおんあま遊おんあま女おんあまる
鹿おんあまの社おんあまありおんあまと云おんあまふおんあま一おんあまたりおんあま今おんあまもおんあま永おんあま代おんあま橋おんあまの側おんあま不おんあま小おんあま祠おんあまあり

○二月十九日古第五代り抵率キチカ以キチカ ○二月天波宮八百年

清忌来年お島子付毎戸社不於て侍寄連御身行あり

又元集 生南の白子 松林ありむる年八百年 ○二月系真如皇太子あたま御あたまあり

宗様おんあま末おんあま詳おんあま ○三月十日後村家おんあま吉良おんあま家事あり一日之世人の

知る不おんあまぬおんあま之おんあま後おんあま并おんあま賛おんあませおんあまげおんあま ○二月麻布御殿初おんあまておんあまあり

○二十三間並深川不後建立 又元集 新二十三年 若きあきのあおんあまのおんあま葉おんあま又おんあまもおんあま本おんあま線おんあま賣おんあま 生南

○深川御殿吉祥寺宗刻并才天を安直おんあま以おんあま 宗基知且院 隆光悟心

○肌おんあま腫おんあまふおんあまとおんあまりおんあまておんあま奉おんあま新おんあま法おんあま慈おんあま寺おんあま并おんあま非おんあま人おんあま小おんあま庭おんあまをおんあま建おんあまるおんあま

○十二月和入冬長管川安清香具在修徳の三人へ高おんあまひおんあま

御免あり

元禄十五年壬午 八月廿

二月十一日山谷屋町よりお火青山麻布急甚浦品川并おんあまりおんあま

その時麻布御殿品川御殿妙おんあま玉おんあまとおんあま立おんあま守おんあま儀おんあま二おんあま五おんあま門おんあま焼おんあま亡おんあま 品川御殿 再建

あおんあま一おんあま妙おんあま玉おんあまのおんあま儀おんあま也おんあま ○二月十五日日本おんあま提おんあまの上おんあま并おんあま傍おんあま京おんあま杭おんあまをおんあま立おんあまるおんあま

○其おんあまよりおんあま葛おんあま西おんあま坂おんあま塚おんあま村おんあま夕おんあま兵おんあま親おんあま世おんあま言おんあま江おんあま戸おんあま系おんあま近おんあま立おんあまとおんあまりおんあま系おんあま御おんあま筆おんあま

集おんあまするおんあま事おんあま疑おんあま一おんあま村おんあま長おんあまの家おんあまとおんあまりおんあま後おんあま忠おんあまのおんあま某おんあまとおんあまておんあまおおんあまけおんあま非おんあま初おんあまあり

とて法人と云おんあまをおんあま求おんあまむおんあま 又江戶西おんあまのおんあま古おんあま院おんあまもおんあま廿おんあま七おんあま日おんあまつおんあまておんあまておんあま

○天満宮八百年御忌 西行上人五百年忌宮後法派二百年忌

○二月五日因多稻新靈告板の檀より靈言をかり眼疾を癒するの法あり水いありの名い

○六月廿七日湯涌靈言と雲山津巖和尚覺彦比丘寂世多六十

○閏八月廿一日舟人北村正立率世多の二男あり管中

○貞徳翁五十年忌正月十八日懐旧の心を

○十二月十日日濱村家の衆士四十七人本意をなす寺八人口小録

元禄十六年 癸未

二月十日濱村家に十七士自京來高士之幕次

新林子甚悦完終升 冬多の身ハむらうの如し 子多原終小 梅一の毛多原

- 春滋盛傳 春滋紀傳 芥不記 進かぬ記 介法記
- 新撰大石記 權花集 春徳忠居記 武家物語記 易水連袂源
- 義人孫室直 志士學記貞正 山科の改書 忠義碑文忠義碑の文字八二條在長徳寺と
- 楠不端 瑞光院記 義士考 義士傳 義士絶緒
- 蓮窓記 清秀記 義士文通 義士傳
- 春巻春徳四十六士端 繪本志居傳 春徳忠居傳厚保巳亥

○二月九日儒作松田映翠率萬合春雲よふ華

○小柄春日慶ち再興○三月麻布春坂辺焼亡

○四月廿一日石川伎中ち後の居梶川ゆ集の子孫為十二才と深川

○五月廿五日為久保天徳門お春玄清の妻三人の田房子と生む

越前と号三著
史のころとを

○十一月十日儒作坂井仙元卒

号御軒泊止
鹿光寺小堂葬

○十一月廿二日雷より電強く夜八時地鳴る半雷の如く大地震
戸隙子らあきあき小船の大浪ふ動く如く地二三寸より五ふより
て五六尺程刻は砂をのこすとあきあきを吹かすも亦もあき
る垣壁もあき流潰るは瓦揺あけ死人夥しく泣きけが声樹小
買田一又雨く毀らるあきより失火あり八時迄津浪ありて房総人
る多く死に内川一士の身引に有ありけ時より救急地震あり
あき小田東の多く夥しく死亡の者九二子二百人小田東より品川迄
を一万八千人房州十万人江戸二万七千餘人
あり一由りの小傷り世時深川世之間半覆る廿二日救より
あり津方ふ及びあり止むを後十二月まで震ふる志をくあり

内廿九日火災の附あき垣壁あり
死のりのみ七百二十九人あり

武川神代の志をもゆりも多てうこうゆ津代のみあり中陸通災

○十一月廿九日救大風幸に退かたりあ火くを幸まき焼又小高より
あ火くは風ふ隊上野湯も多天神聖堂も廟遠栢向柳系隊系茅町
南六神田より傳了町小舟町堀田小細町幸所へは回向院の辺津川
水代橋まであき橋あき焼屋敷の五所鏡の志を世小地震火事
といふ○回向院一云親善像山門小女並一はらり十一月靈友の
告ありて橋上よりあきを廿二日夜地震の附山門也倒るてひで
廿九日の大火小徳聖焼より世時本を指退てつらあきまきり
諸人候心のあきまきりて多預群集せしこと
一云親善と云ふ一云初聖一
てと念親叶くといふことあり

世年間記事

武川神代

廿三

○は火事不能人の枝うあ焼くあり「焼ふりりされも橋さうぬらちま考
梅り番やあつ一書り焼見群 牧童

△月橋を城の町若ふ本町特橋お雲下△赤良家根町松屋屋同屋栢屋約形ひね
庭△多物をはきり終末町丹波屋与他△芳版屋まきや△食けんさん合終山形川
河沿や同而△令庭屋△赤良がせんべいの八丁屋後を
清方屋つその外あつて△まきと終末まきハ書す

○赤良裁さる菱川の浮世繪いよとふりまゝり文川長まもは時代
の浮世繪作あて元禄宝永の以りまゝり

○此時代俳諧冠り付始り世ふりまゝり○筆曲山崎換校を橋勾当
安政川渡改めりる花都といふ所改小唄ニ味縁の上とま

○一様々他の朝書松志の免一名あつち系あといふ小唄温の授前小う
△方よりそ中りおけ○幫簡修の全体といひも無けり

○一節切の節中古より盛ふりまゝ此時代まゝま様異いり
○世事改小揚弓のみやこ二中此道を得り一表二百本録り

的仲まゝりといふ元禄の改芝ふ五席末願といふ五人ののまの

上より百八拾はまの矢員江戸中結改場の看板日記一紙双の

上よりといふ以来百八拾はまの常の事ふりて百九拾はま或は七八ふ
るふあつてこの程ふ世人うへ上より一様色り下畧こふ一併といふら
系原の人ふて今井

一併といふり貞享中江戸より破定具り揚弓射後達矢抄の返解へ追考を著せり
上より語の終ま一中のるああははははといふは盛りふり色實定の以りといふても
結改協十二ヶ所を再訂助麻子大令并
載り今この態かへく慮さるるこらん

○葛布の平二所と院観世書明神所元禄中浄清といふ海門處
紀あつて流流以○澤々忍帽子忍帽子のたちよ仍ちる
詔のありを付る

○小倉文庫の子孫お流行○山本翁の悦ふ箱小青を盛る事
元禄の末の以止室永の以り観蓋ふ盛る事ふ盛る事ふ盛る事

といふ○吉原の遊女八朔ちんさくふ白あつむくを盛る事元禄中江戸町
まて丁目巴を源を盛る事抱へる福といふるまをの以盛る事

居けるに別荘の客あり一州府居るに白むくの修し一橋を入

一ける客の難あり一とり是を言似く八朝六一般小自むく
を言る事小あり一は花街大金小りり
ある昔の花女小津丹後
お茶崎長門お茶崎ありしものあり

尾書のともしく武家の例小のしとせ
八朝小自き夜夜を言一とる尚て考

○本八町坊三丁目辰紀作由左文方是
材本をありせありし
紀文を言て能号千山云 霊巖寺境

○本八町坊三丁目辰紀作由左文方是
材本をありせありし
おまはりの大言あり 此友人元禄中橋小大分限とあり一

人の子あり花街難劇小遊ひ行くの場を言一巨万の家を費
一ける事花人の初の新あり一とる賢せは

○江戸真砂六十帖
元禄中の
みと能言 小敷人坊とえらとる喰町小住と今と

橋本町一引移ると流り○玄家茶活小り小武に素意思とら
つまごひ

信田小右衛門小山判官を殺一とる流と云はる素意福前の橋

社小小山判官の靈祠あり又素意の坂下海井小平の屋敷は若按
ち及屋敷境の取小小山判官の塚小あり一けり中敷跡りて元禄
の頃まであり一とる崩きて今もあつたりけり

○元禄中の豪家非田住り今町小住せ一屋敷は元禄中のありの
唐仏の釈尊の立像を得て身持弘福寺に寄付一奉るとは元禄

友阿りえ下谷若菜玉院一安座は元禄中代々の墓は若菜玉院小在
彼支那の像もありとせ○元禄中江戸各法寺に切とあり

○元禄六年温徳朝の江戸繪巻小毎二丁目三丁目の方志に今所
の地地南傳る町方志に今所繪巻あり其勢橋へ飯橋と記りある

橋へ矢の内流の南とあり一とる月橋の障へありとあり
とらひの天あり元年
の傳小記せり 水

乃橋へ吉祥と橋とあり今今の島橋とありは橋とあり
は橋向在
と記せり

村松町を筋透山内

山内の筋を連ね
町の旧地の例

ありて青店と記せり

村松町八重
條の号あり

高この所
あり

昔の志ある橋と今の如くありぬ橋とあり志ある橋のたつ今

のあつて小細町を丁目の先の橋を志る記せり今の山下門を介

ひびやとあり

月十三年の馬あつた橋とあり
又山内を貫く橋山内とあり

上野清の親善堂六分の抄

山と唱へる所の山あり大塚後志の門前田圃あり

○三圍稻荷社内一丈の狐あり例の稲荷に産みたる狐の尾をふかき
狐の尾をふかき狐の尾をふかき狐の尾をふかき

宝永元年 甲申 二月晦日改元

二月廿七日地震は月まで交り震ふ

○女木橋と新大橋のりる小道を付く

去年の大火のあつた
人多く死せるゆゑなり

○二月年号改元あり一祥吟

宝永の拾下りをも色糸の糸

尉里公

○五月二日本国流る海元祖本國親伝率

十日の本流る
并兼い

○六月十五日より七月朔日二日浪人を辺大島大川筋を介大永八月

十日より山ありて中総橋と股と多押一崩一田畑を家子二平被破

して死亡人数を知りて事所河川流系山岩中岩辺屋宇をひび

○六月廿三日小堀改元率

喜良後三男林十左衛門の率
書をよめしむる一率六十六

○七月廿五日より九月朔日まで復元する不於子土佐山五大山

善護園張あり○八月郡人より昇立率

四十八才二世
の立率あり

○九月新田明社社所遷すあり

○十一月聖徳宗再建減廿五日遷元

○今年たふす橋あり不始て歳世條の見せを
かゝ名物とあり一々一書本終りなり

同二年 乙酉 四月

寶永三年丙戌

正月二日備前柳井藩

名希綱号管海林小吉郎
飯河柳田夏子并其妻也

○正月十日和子刻赤田須田町より火一ヶ筋遠見附土手町

赤田町より赤田石町通り小橋町河津町大門町より長谷川町和

泉町安海町辺新大坂町新材本町迄より火一ヶ筋遠見附土手町

及別館より○正月十八日圓向院中於て火警二回奉火火小死火

せ一葉五十年忌吊法事あり○二月廿日夜亥刻赤田須田町より

火一ヶ筋遠見附土手町二町餘焼亡とす

○二月十日和子の奉斎膳奉

之由氏必恭光号を齋膳膳奉令致すなり
葉以禮世 此の膳奉りこそなれり

命のそとを
りふりぬり

○二月十七日備前栗山藩奉

名徳 林源助
駒込光吉并其妻

○六月元字令吹替あり足を空字報り

○七月より根屋権現社商所の火一ヶ筋再興十一月成終に舊地を今
りの園子坂の新あり○七月廿二日大要救う事あり

○八月狩野松林懐法因田植の歌金五八幡宮へ掲る

○九月十五日亥下刻大地震○十一月九日医師頼生方菴奉

名徳
但珠

の父之三田
長松と其妻

○屋敷船百艘不極

名徳同江戸砂子
捨道小より

○十一月十六日己刻に谷作町より火一ヶ筋丁半餘焼

○同日廿日夜子刻和泉町火一ヶ筋大坂町須吉町迄五ヶ筋町堀

町葺屋町より火一ヶ筋長谷川町迄五ヶ筋赤田町幅二町長十

五町計り焼亡

同日奉 丁亥

正月十日備前柳井藩

武江三辰表之三

施放の事あり ○正月十日申刻漢田新同心町よりお火事所一の
 橋舟才て安あり申の内々業平天祥の社を元小橋ふり安子別儀の
 ○二月晦日佃人攫奉生角率 甲七才 号室晋吾 二本枝上行ち小葉葉
 ○三月八日大火あり 申正保福小記り そ抄不 未詳 ○俣城朝熊山出處あまがさ子こ
 流井圓向院を寢帳 ○五月廿二日東叡山勸學院より翁僧於寂

○七月二日下谷雲霧編も御持増養法中寂 在信の目い田系より 甲及流宮受ふる者一人
 ○八月朔日小石川を雲霧編も御持増養法中寂 マラハハハ
 ○九月は日熊谷安左衛門率 後弟本法も小葉あり碑のた小葉相まの月八生夜 園をてていんを ちくとも浮世のやの里もか
 ○九月廿七日儒所松浦交羽率 六十才公黙然友立而 日暮至南宮も小葉
 ○十月十三日佃人攫奉生角率 五十才大約は常檢も小葉存を釋世の句 一葉發咄ひくをちる風の上
 ○十一月十六日連舟原里村恩陸率 六十九才

○徳國銀れ古幣止あり

○十一月廿日より富士山の根より頂をりは焼く天晴く雲蓋地震
 夥しく雲蓋白灰降りて雪の如く地を埋む為南嶺よりおびりり
 あり白晝晴夜のよく小流は燈籠挑灯をとりを廿二日強ふまじく
 廿二日おびり天晴を敵日を深く法人安堵を又廿六日廿七日
 再び天曇り砂降り雲蓋の如き雲死地震あり是より雲蓋降
 廿八日本常の如く廿九日おびり山を宝永山といひ世人は以て噴煙
 を喜ぶ いふ拍煙葉小又えたり竹首富士山燒る例の延暦十九年三月廿二日より 四月十八日と今年のおく焼員親元年五月十歳白煙ると云く
 ○十一月廿八日法人を攫奉生角率 三田小山 大葉七の葉

宝永又年 戊子 正月廿
 正月元日大お ○宝永正月廿二日武蔵相模三河五く砂降

○二月地上小白色を以て
○三月秋元彦は岩田彦助といふ
武員入る那場なむら兼井の田蹟久く處を久んを欲き
之標を重傳小輝を建る○四月朔日兼人山田宗編率八十五才
在が額ち地中長竜ち不華に子
二月山田久作宗屋生初極率字俊と云

○五月十又疎よりて通用始る
孝不室永通室妻の輪ふぬ久世月と
あり怪一寸二分重一女文字小田宗彦の

○深川の河川
世に地産ちぢん正元金鋼社の地産を六部を造る
門人植門うゑと云く

○今年より始て江戸と新小安すす南品川品川と
今年
九月
山谷在祿

○巳谷泰字いと云く
九月
深川靈蔵と云

○同新永代と云く
七月
○冬より麻疹流行
号 自中岡流祖
并は法編ち事華

○十月廿二日算沙の作園の助孝和率
号 自中岡流祖
并は法編ち事華

○後志之郡神事地佛親世喜宗帳

○十一月十五日深川八幡宮を造営遷宮
○十二月三日將野隨川宗彦

○十二月廿二日後夜十代麻布率
八十三才

○十二月谷中威敷と云く
今の
の隣ある空乃店宗小尚齒合あり

○十二月廿二日後夜十代麻布率
八十三才

○六月家字銀通用をいさめる

○七月より九月まで日向院より洛東浄光院迄不動尊家帳

○九月多賀朝湖序の巻より洛東一掃く号以

○十二月廿二日能人小澤得入奉

○後辺事店対話記成

宝永七年庚寅 八月閏

二月上野清の移居社康車約形を移す

○二月二ツ宝銀法改

○湯の丸日向波守宗刻開山本食家等上人等

○喜回向院より移す

○三月十九日角田川本母を掃る丸七百世二年忌大会佛回向

○二月より五月まで

○二月より五月まで

○二月より五月まで

○二月より五月まで

○二月より五月まで

○七月十一日

○七月より八月まで

○九月廿一日

○十月十日

○十一月

○十二月

○正月

大火あり一由あるせり○十一月青山梅窓院の齋齋を焼尽
とせし時住持法蓮社末巻鏡的上人の爰小幡女房の家畜
ありて佛果を得て一依て一面の鏡を携へ来り別く鏡を
加へて鏡を携へて六解脫を以ての因縁ともあるべしと云うと只
して爰爰て後例も一面の鏡あり上人等其の品ひをわすれこの
鏡不かくして鑄改しむるなり

○十二月十九日末小別作田小柳町つき真田お山中を爰と
お火水為風烈し一々半町石町八丁塔靈巖海多おぬる長干
五町幅二尺町より七八町おぬる翌日辰別結了

○年中七面板七面大明神（菊とつる女は西き前余の儀
爰の若ありておある所とを

此年間記事

宝永中靈爰ふと門て南形原の月小をくる像の岡麿全江戸
金地院境内に移す

○宝永中痘病を平り一以約込の百痘表たりすの妻登米の痘を
帳り約込宮寺の市小賣りる求物り一りの痘病の患をのりま
とりの後宮寺よりの方おとをまり此時代近辺の童子を以て
病けりとし○塵塚小藩摩芋の本日本小の宝永元申来り
あり藩忍より後後り末長藩をくまらり種くはけなり享保
廿年乙卯小石川書屋に書く裁くをえふのり弘まるとり記り
考をわくせり ○鼻紙袋この世より始る

○宝永中お若お落お洞お実蔭お宮お本お中お向の所を

お中お月お花お知お人お貝お雪お道お雲のおり

○寛永九年板遠^{さかちとちとち}近^{ちか}座^ざ常^{じょう}の江戸島小^こぬ^ぬ玉^{たま}揚^{あげ}合^あの西^{にし}より
有^あ棉^{わた}の糸^{いと}の南^{みなみ}側^{がわ}の江戸島小^こぬ^ぬ玉^{たま}揚^{あげ}合^あの西^{にし}より
軒^{のき}を並^{なら}べし 飛^と戸^と時^{とき}候^{こう}天^{あま}満^みより東^{あづま}の方^{かた}小^こ門^{かど}あり

文江年表卷之三 畢

